

チャレンジコミュニティ

Challenge Community Club

通信



第26号

2014.10 vol.26



紅葉



パリ凱旋門



平成26年度ホームカミングデイ

CONTENTS

- **ごあいさつ**
高輪地区総合支所 協働推進課長 野澤靖弘
明治学院大学社会学部
教授 和気康太 / 准教授 明石留美子
- **平成26年度CCクラブ・ホームカミングデイ**
特別講演 明治学院大学 学長 鶴殿博喜
地域活動の紹介
- **パリ研修旅行(速報) / 会員の地域活動紹介**
- **運営委員会報告・活動計画**

チャレンジコミュニティ・クラブの さらなる飛躍に向けて

高輪地区総合支所協働推進課長 野澤 靖弘

チャレンジコミュニティ・クラブは、本年度で発足から7年目を迎え、約420人の会員を擁するまでになりました。クラブの皆さんは、これまで培ってらした経験や知見に加え、



チャレンジコミュニティ大学で学ばれた知識を糧として、区民参画組織や各地区総合支所の地域事業、さらにはボランティアグループ等の地域福祉活動など多方面でご活躍なさっています。このような活動の積み重ねが地域コミュニティを一段と活性化しているのだなど、日々の仕事を通じて実感しています。皆さんの積極的な活動に心から敬意を表します。

さてここで直近のデータに注目しますと、本年9月の港区の人口は約23万8千人、うち高齢者人口は4万1千人と約17%を占めていますが、東京都の約22%、国の約25%に比べますとまだまだ低い値となっています。しかし、港区人口推計を見れば、高齢者人口は今後10年で約15%伸びる見通しとなっており、生産年齢人口に頼って地域社会を動かしていくことは少しずつ困難になりつつあります。

目を転じて、高齢者の要介護認定者数を見ると約8千人、その比率は約20%となっており、5人のうち4人は元気な高齢者であることが分かります。内閣府は「エイジレス・ライフ」と銘打って、社会参加や異世代交流等により生涯にわたって自由に生き生きとした生活様式の確立を目指しています。平成24年度に表彰を受けましたように、チャレンジコミュニティ・クラブの皆さんは重要な人的資源としてももちろん頼りになりますが、現役時代に培った経験や知識・暗黙知は地域にとって貴重な情報資源であり、元気な高齢者である皆

さんの持てる力はまさに地域の財産です。

東日本大震災から3年余を経ましたが、この間、防災面を中心として、地域コミュニティの考え方も変化してきました。自治体単独の経営資源には限りがあることが自覚され、連携と協働によって自助・共助・公助のバランスを確保し、安全・安心で活力ある、より良いまちづくりを目指そうとしています。

地域が抱える様々な課題を解決するには、行政はもとより、地域の方々が様々な活動を通じてコミュニティの絆を深め、相互に連携して主体的にまちづくりに関わっていくことが、何より大きな推進力となります。チャレンジコミュニティ・クラブは地域の課題を解決する地域リーダーの集合体であり、このような時流のメイン・ストリームに位置しています。地域コミュニティの育成や地域の活性化への活動を推進する組織として、その役割はますます重要になってまいります。皆さんの持てる力を最大限に発揮できるよう、区は様々な支援を続けるとともに、積極的に情報提供を行ってまいります。チャレンジコミュニティ・クラブの皆さんには、既に提供された情報を基に、区あるいは各地区総合支所での事業や地域活動に多数ご参加頂いています。職員一同、感謝いたしますとともに、日々の職務の大きな励みにもなっています。

現在区は、平成27年度から始まる基本計画を取りまとめています。チャレンジコミュニティ・クラブの皆さんの中から検討委員会のメンバーとなっていただいた方もいらっしゃる、お力をお貸し頂いています。その成果もあって、分野別、地区版計画ともに、住民参画による計画が数多く盛り込まれる見込みです。

是非これからも、地域の貴重な財産であるチャレンジコミュニティ・クラブの皆さんのお力添えを頂けますようお願いいたしますとともに、地域コミュニティの方々とも皆で手を取り合って、区の将来像である「区民とともに創る安全で安心できる港区」を実現してまいりましょう。

被災地への支援活動を通して考えること

社会学部社会福祉学科 和気 康太

チャレンジコミュニティクラブのみなさん、お元気ですか。元グループアドバイザーの和気康太です。私は、チャレンジコミュニティ大学の初期の頃にその活動に関わらせていただきました。私の近況としては、東日本大震災以降、継続して被災地支援に関わっていることを挙げたいと思います。



社会福祉学科には「福祉開発フィールドワーク」という授業科目があります。実は先月、この授業の一環として学生たちと一緒に約1週間、石巻市、気仙沼市、女川町でフィールドワークを行って来ました。被災地は3年半が過ぎ、震災直後に散乱していたがれきはほぼ撤去されました。したがって、一見すると“落ち着いた”感じがしますが、まだ多くの方が仮設住宅に入居したままで、「復興」と呼べる状態からは程遠いのが現実です。そのなかで被災者から「復興とはもとに戻すことではない。新しい地域（コミュニティ）を創り出すことだ」という言葉を聞きました。復興住宅ができて、所得が保障され、さまざまなサービスが提供されても、ひとはそれだけでは生活していきません。やはり、ひとは他者との関わり（=絆）のなかで、助け合い、支え合って、生きていくことが大切なのだ、とあらためて思いました。そして、これはチャレンジコミュニティクラブのみなさんが日頃、地域のなかで活動されていることと、どこかで通底しています。地域活動は目立たない、地味な活動かもしれません。しかし、それは間違いなく、“この国のかたち”を変えていく活動なのだと考えて、これからもぜひ前向きに取り組んでほしいと思っています。

CCクラブの皆さまへ

社会学部社会福祉学科 明石 留美子

こんにちは。CC大学第3期より第3グループのアドバイザーとして皆さまとご一緒させていただいております明石留美子です。私は社会福祉学科で、人々の



ウェルビーイングを研究し、国内外を問わず、人々が質の高い生活をしていくためには何が必要かを考えています。今年、港区の住民の方々のウェルビーイング（人生の満足度）には何が影響しているかの研究をまとめました。東日本大震災以降は、災害に関する調査にも従事しています。この夏には、アメリカから防災の専門家をお呼びしてセミナーを開き、CCクラブの皆さまにもたくさんご参加いただいて住民を主体とした災害への備えについて考えました。

これまでCC大学の皆さまとご一緒するなかで、毎年、グループにはそれぞれのカラーがあることに気がきます。しかしグループの個性が異なっても共通することは、地域社会のなかで積極的に活動される方々がどのグループにも必ず多くいらっしゃることです。民生委員として、ボランティアとして、また町内会や自治会のなかで活躍される方がこれだけ多いことにCC大学の頼もしさを感じます。私自身も港区民であるため、普段の買い物や子どもの地域活動などの場でCC大学やクラブの皆さまに多くお会いいたします。先日も地域防災の勉強会で、たくさんのCCクラブの皆さまとご一緒しました。少子高齢化が進行する日本で、高い意識をもったプラチナ世代が積極的に地域貢献される所は多くはありません。CCクラブの皆さまが、少子高齢化時代の新しい地域のあり方を作り上げておられるのだと感じています。皆さまと共に歩んでいけることを嬉しく思っております。

平成 26 年度 CC クラブ・ホームカミングデー

～特別講演と地域活動の紹介～

7月26日(土)、14時より明治学院大学白金校舎にて開催され、139名が参加いたしました。当日は明治学院大学学長・鶴殿博喜先生の特別講演と、CCクラブメンバーによる地域活動の紹介が行われました。

「特別講演」 ～ドイツをめぐる雑感～

講師 明治学院大学学長 鶴殿 博喜

要旨

皆さん、こんにちは。今日は地域ということも絡めて、地域に根を張るドイツ人というテーマで話を進めさせていただきます。



(1) ドイツは地方分権の国

まず、ドイツという国は、地方分権の国、地方が集まって出来たような国です。現在、ドイツには16の州がありますが、その16の州の内3つは都市で、ベルリン、ハンブルグとブレーメンは州と同等の権限を持っている。小さい州の集まりがドイツを作っていると考えていただければ良いと思います**(地方自治が当たりまえの国)**。

劇作家のシラー(詩人)は、南西ドイツのバーデン=ヴュルテンベルクのシュトゥットガルト(州都)の北東にあるマルバッハという小さな町で生まれ育ちました。シラーは20代のはじめに、シュトゥットガルトの北西にあるマンハイムの国民劇場で、初めての作品「群盗」を上演しました。大変な騒ぎになるほど、衝撃的な影響を与えました。無断で領外に出たことで領主の逆鱗に触れ、結局、町から脱出することになります。その時に、シラーに同行した友人が記録を残していません。この逃避行が国外脱出のように書かれており、とても印象的でした**(シラーの脱出)**。

18世紀にはまだ、300以上の領邦国家がありました。19世紀になると、ナポレオンの戦争があって、領邦が整理され、1871年、プロイセンのもとで統一国家を成し遂げる。ナチスの時代は中央集権的になりますが、戦後の西ドイツは連邦共和国になるわけです。ドイツという国はもともと、それぞれの地域が集まって、一つの国をなしていたが、それが今もなお生きていて、地域(州)の権限が強く、地域独自の伝統、文化が維持されていると考えてよいのではないかと思います。

17世紀に、30年戦争という宗教戦争があり、そのため国土が荒廃しましたが、18世紀になって、レッシング、ヘルダー、ゲーテ、シラー、カントそしてヘーゲルなどが次々に登場して、文化的な影響力をもつようになった。イギリスやフランスに比べるとおそらく200年遅れて影響力を持つ国になりました**(遅れて登場した大国)**。

(2) 地域とことば

ドイツでは、地域で言葉が異なるということを、何回も体験しました**(ドイツは方言・地域語の国?)**。

バーデン=ヴュルテンベルク州のシュトゥットガルトの少し南西にチュービンゲンという古い大学町がありまして、そこで私は2年ほど研究生活をしていました。とにかく、北ドイツから来たとき、この地方の駅のホームに降り立って聞こえてくるドイツ語が全然理解できなかったという話を何人もから聞きました**(北ドイツ人は南ドイツ人のドイツ語がわからない?)**。私はロイトリンゲンのアパートに住んでいたが、廊下でケルン出身の奥さんと立ち話をしますと、「挨拶の言葉も違うし、肉屋さんに買い物に行っても、店員さんの言葉が解らないの」と私に愚痴を言うのです。ケルンに行った時、カーニバルで有名なこの町では、その前夜に、飲み屋でドンチャン騒ぎをやる。そこで、ケルンの人とベルリンの人が騒ぎながらお互いにそれぞれの地域の言葉がわからないと言い合っていました。

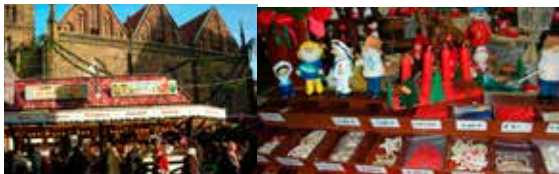
ドイツ語といっても、一様ではない。ニーダーザクセン州のハノーファーあたりのドイツ語が標準的と言われています。ドイツの詩人で、シュヴァーベン人のヘルマン・ヘッセですが、ヘルマン・ヘッセの文字で書かれた詩というのはとてもシンプルで美しいですが、ヘッセの朗読を聞くとシュヴァーベンなまりです**(ヘルマンヘッセのシュヴァーベン・ドイツ語)**。

ドイツ人の知人から聞いた話ですが、ある外国人がケルンのドイツ語を覚えてしまったので、ケルンから外に出たら全く通じなかったということです。言葉が地域に密着していて、それを誇りにしているということです（ケルンでドイツ語を覚えた外国人の話）。

北ドイツのハンブルグでのことですが、1年に何回か、ノー・カー・デイというのがあって、その日は1日中市内と近郊の公共交通がすべて無料になります。どこの都市でもこのような日があるのか知りませんが、環境に配慮したユニークな試みです。

(3) 地域の祭り

ドイツの場合、クリスマスは、11月最後の日曜日から4週間続くアドベント（待降節）が準備期間になります。この期間に12月23日まで全国でクリスマス市が開かれます。地域によっては、12月31日まで開くところもあります。いずれにしても、ほぼ1ヶ月間こういう市が開かれています（ドイツで盛んなクリスマス市）。クリスマスの起源については諸説ありますが、一説によると、ローマ時代にミトラス教では、一番大きなお祭りが12月25日で、それがキリスト教に取り入れられたそうです。25日から始まって1月6日までがクリスマスです（クリスマスはいつからいつまでか?）。12月6日は聖ニコラウスの日です。



ブレーメンのクリスマス市

次にカーニバルの話ですが、ケルンあたりではカルネバル、南ドイツではスナッハトとかファッシング、ロットヴァイルあたりではファスネットという言葉が謝肉祭のことを表しています。ステンが、ドイツ語で断食をするという意味で、断食をする前の晩、断食に入る夜、それがスナッハトです。断食に入る前に飲んだり食べたりして、断食に入る。それが昔からの習わしのようなのです。断食に入る前のお祭りの行事としてケルンのように非常にモダンで、仮装（ピエロ）の格好をして行列をする所もあれば、ロットヴァイルのように、昔ながらの伝統的なお面を被って行進するという所もあります（カトリック地域のカーニバル *Karneval*、*Fasnacht*、*Fasching*）。

(4) ナチス時代の清算

（編集部注：記念の施設、記念碑等々を写真で紹介）

ドイツにはいろいろなナチスの清算の記念碑があります。ハンブルグ大学の横にある公園のなかにあった石碑です。こう書かれています。「1933年にハンブルグに24000人のユダヤ人が暮らしていた。この場所からハンブルグの数千人のユダヤ人市民の苦悩の道が始まり、その道はナチス政権の絶滅収容所で終わった」。これは別の石碑ですが、「ハンブルグのユダヤ人市民を偲んで。彼らは国家社会主義の暴力支配の時代に、数千人単位でこの場所から死へと送られた。このことを忘れてはいけない。用心を怠ってはならない。」と、現代に対して、警告を発している。

次はバンゼー会議の記念館です。これは「この家で1942年1月に忌まわしいバンゼー会議が開催された。国家社会主義の暴力的な支配によって殺害されたユダヤ人の同胞たちを偲んで」と、書いてあります。

ユダヤ博物館では、歪んだ床を経験しましたし、オットー・ヴァイト記念館では、ユダヤ人を救ったドイツ人の存在を再認識しました。ヴァイトは1940～1945年までユダヤ人の盲人に仕事を与え、その工場を経営することで、彼らは生き延びることが出来たのです【強制収容所（絶滅収容所）】。

ベルリンの郊外のオラーニエンブルグに強制収容所の跡があります。最初の門のところで、「アルバイトマッハトフライ」、要するに「働けば自由になる」、そういう有名な言葉が書いてある。そして、衝撃的だったのは、ポーランドのクラクフの公園のなかにあった無人の椅子です。無人の椅子がたくさん置かれている。これは、ユダヤ人が連れさられたことを象徴している表現と思います。90年代に映画で有名になったシンドラーが工場を経営してユダヤ人を守ったのもクラクフの町で、公園に比較的近い所にシンドラーが経営した工場がありますが、公園の椅子が非常に印象的でした。

ドイツにはいろいろな特徴がありますけれど、地域中心ということから始まって、2度の世界大戦の反省を今に至るまで残して、これからも残していこうという意志というものを色々なところで感じさせるという気がします。

以上で私の話とさせていただきます。どうも有り難うございます。

平成 26 年度 CC クラブ・ホームカミングデイ 地域活動の紹介

{芝の語り部}

5 期生 増田 由明

芝の語り部は、芝地区総合支所協働推進課「まちの魅力発掘部会」のガイド養成講座修了生がまち歩きボランティアガイドをしている団体です。現在 CC 大学修了生 7 名がその中心メンバーとして活躍しています。

活動目的は、芝地区を中心としたまちの魅力を発掘・発信をしていくことにあります。

25 年度の活動は、以下の通りでした。

- ① 史跡巡り 10 コースの策定とそのチラシ製作および葉 5 種類作成
- ② ツアーを 24 回実施し、延べ 380 名に芝地区の魅力を発信
- ③ 勉強会を 15 回実施

特に芝地区の地域との連携を大切に、各いきいきプラザ、高齢者らくらくウォーキング、そして地元企業の社員研修ガイドの他、区報にツアーを 7 回募集して区民の方に芝地区の魅力を発信しました。我々は生涯学習の一環として知識の習得、社会貢献、人と触れ合っ
て仲間を作るなどの目的をもって、お互いにフリーの立場で楽しく活動をしています。

現在は区報で募集をした「まち歩きガイド 7 期生養成講座」を実施しています。今後とも多くの仲間を迎えて更に企画の充実を図り、地元に着目して活動していきます。

歴史・史跡の勉強、まち歩きガイドに興味のある方は、芝の語り部の仲間になってみませんか。



増上寺南霊廟跡でのガイド光景

{みなと第九を歌う会}

2 期生 田部 揆一郎

「みなと第九を歌う会」はベートーベン交響曲第 9 番を演奏するために、港区の人々が中心になり、3 年ほど前にできた合唱団で、CC 大学修了生十数人を含む約 120 人の集まりです。これまで 2 年間で 2 度の演奏会を行い、多くの皆様にご好評をいただきました。今年度は 3 度目の演奏会を下記の通り行います。今回は年初から、オーケストラの編成をめざし、約 80 人の「みなとシティオーケストラ」として発足します。

目下、合唱団は熟年者中心で労音・日本フィルなどの合唱指導をされた山口浩史先生の指導の下、またオーケストラは若者中心でオーストリア・チェコなどの楽団指揮の経験の有する中島章博先生の下、鋭意練習を重ね、お互いに立派な演奏会をめざし、意気投合しています。

本演奏会は、港区や外国の大使館の後援を頂いており、全員で力を合わせ、港区の人々の音楽への理解を深め、人々の親睦、交流を強めたいと考えています。

演奏会

日時：平成 26 年 11 月 24 日（祝） 14:00 開演

場所：メルパルクホール（芝公園）

曲目：第 1 部 エグモント序曲 ベートーベン作曲

第 2 部 交響曲第 9 番 ベートーベン作曲

演奏：みなとシティオーケストラ（中島章博 指揮）

みなと第九を歌う会合唱団

チケット申込み先：田部 揆一郎

email : ktanabe@themis.ocn.ne.jp

Tel&Fax: 03-3449-5750



2012 年、東海大学との公演

平成 26 年度 CC クラブ・ホームカミングデイ 地域活動の紹介

{ブルモン料理研究会}

6 期生 斎藤 正精

会発足のきっかけは区主催の「男のための料理教室」に参加し 10 ヶ月の講習を修了したときでした。折角知り合いになった仲間たちとコミュニティを継続しながら料理研修を続けられないものかとの思いから、自分たちで運営する料理会を立ち上げました。

会員は 10 名からスタート、一般の方以外に CC クラブ 2 期から 7 期までの会員がシリーズで参加しているため、いろいろな情報が飛び交い、毎回大変賑やかな料理会となっております。月例会の実施場所は、青山いきいきプラザと会員の高層マンションのパーティールームやガーデンを交互に利用、バーベキューやお酒を楽しむことも隔月で可能になり、メンバーには受け入れられたようです。

ブルモン料理会は究極の美味を追求、新鮮な食材にこだわり海鮮系は築地市場内まで朝一で出掛けて仕入れられます。こんなことで会員の出席率はとても高いです。自分たちで企画、実行、反省、対策を行い料理のスキルを着実に身につけてきています。会の目的も実生活に役立つ料理を通じて、まず「男の自立」を目指し、これから永く続くであろうセカンドライフに自助努力していく日常を確立することです。



7 月の赤坂・月例会

当初は会の継続がやっとでしたが、今年は 4 年目を迎え月例会や健康ウォーキング以外にも出張料理会、料理会グループ間でのコンテストや田舎生活の体験（遊び楽しみながら産地から直仕入れた野菜や食材で料理を楽しむ）などもメンバーと共にプランし、実施

していきたいと思います。

ブルモン料理研究会への問い合わせ：

email : nakajee12@yahoo.co.jp 斎藤まで

{Kiss ポート・エンジェルス・ハーモニー}

5 期生 暮地 友子

16 年前に港区 Kiss ポート財団が主催したハンドベル講習会に集まった 15 名の初対面メンバーで結成されました。音楽好きで、主にピアノやバイオリンなどの楽器の経験者の集まりでしたが、イングリッシュ・ハンドベルという楽器に触れるのは皆初めて。10 回の講習が終わり、財団の担当者から「これからグループを作って高齢者の施設にボランティア演奏に行ってください」との提案が。それが私たちのスタートでした。

あれから 16 年。最初の頃はボランティアといっても何をしたらよいかわからず、ハンドベルで演奏できる曲のレパートリーも少なく、演奏依頼をいただくと緊張に震えたものでした。ひとつひとつの演奏を誠実に、「今できることを一生懸命に」ということを心がけて演奏した。活動は港区から東京都・神奈川県・群馬県へと広がり、ついには真冬の北海道の然別湖へ。-20℃のアイスバーの中での演奏という貴重な体験をした。聴いて下さった方々の笑顔や感動の涙に、いつも私たちの方が勇気と幸せな気持ちをいただいた。

誰かの役に立てることのありがたさ、人に感動を与えることのできる幸せ、そしてなにより 16 年間同じ目的を持って互いを尊重しながら過ごして来たメンバーの絆は、かけがえのない大切な宝物である。「天使のハーモニー」と呼ばれるイングリッシュ・ハンドベルの心地よい癒しの音色に魅了されながら、まだまだ活動を続けて行きたいと思っています。



イングリッシュ・ハンドベル

平成 26 年度 C C クラブ・ホームカミングデイ 参加者の感想・コメント

7 期生 中村 喜美子

3月の修了式以来、久しぶりの学校。鶴殿先生の講演テーマと柔らかな語り口に引き込まれました。

地域に根を張るドイツ人。地図と睨めっこをしながら話に耳を傾け、国、ことば、祭り、「地域」という言葉のその重みが強く印象に残りました。

「ナチス時代の清算」、過去への反省、残そうとするドイツ。私は表面的なことしか分かりませんが余りの痛ましさに目を向けられません。

「地域活動の紹介」は皆さん生き生きと語られ楽しかった。特に芝の語り部まち歩きは何回か参加し、今まで知らなかったまちの再発見をし、加えて歩くという健康のおまけ付きです。

活動報告を聴きながら、C C 大学で学んだ事で自分に何ができるのか、学んだ福祉を生かせる道がないのかと改めて思いました。

5 期生 水谷 久美子

「みなと第九を歌う会」のことは、合唱団メンバーから聞いていたので、一度見学に行ってみたく思っていました。

お話を伺って印象に残った点は、この団体は恵まれているということです。まず港区がサポートしている点、それによって同じ区内の東海大学や明治学院大学などからも協力・支援をしてもらえるのでしょうか。どこの団体でも練習会場の定期的な確保が一番苦労している点で、広い練習会場を毎回貸してもらえるというのは大変有難いことです。そして港区、地域の大学のサポートの連鎖で、次々と各大使館や地元の企業からも様々な形で協力が得られる、といった恵まれた団体ではないでしょうか。若手中心のオーケストラ 80 人、そして合唱団員が総勢 120 人ということで、きっと迫力のある演奏会になることでしょう。11月の芝公園のメルパルクホールでの名演奏を期待しております。

「Kiss ポート・エンジェルズ・ハーモニー」の活動報告をとっても興味深く拝聴いたしました。400年前にイギリスで生まれたイングリッシュ・ハンドベルという楽器の説明から、各地で活動された映像まで見せて

いただきました。衣裳も華やかで、グループの明るい雰囲気伝わりました。

私は一度だけ明治学院チャペルで高校生の演奏でイングリッシュ・ハンドベルを聴いたことがありますが、大きさによって音色が異なり、低い音色の楽器はかなり大きなものでした。10 数名のメンバーで東京近郊だけではなく、全国各地で活躍されているようで、素晴らしいことだと思いました。大きな楽器を持参しての演奏旅行は体力的にも大変なことでしょう。それだけ継続出来る皆様のパワーの源は、16年前のグループ結成当初からのメンバー相互の信頼関係と、皆様の心のハーモニーがあればこそなのでしょう。これからも益々の御活躍を期待しております。

【参加者アンケートのコメントから】

学長の講演に対しては、地方分権、言語、祭り、ナチスの話と関心度は個々の会員それぞれですが、ナチスの清算の話が一番印象に残ったというコメントが多かった。「ナチスの清算を通じて、ドイツ人の懐の深さを感じた」、「若い時からドイツ文学や音楽、ドイツ旅行や出張等なじみがあったが、言語の多様性は初めて知った。また、第2次世界大戦後の取り組みも戦中生まれとして大変にしみた」といった、コメントもいただきました。

4つの活動紹介については、港区らしく歴史、音楽、食と幅広く（その多様性が良い）、そのプレゼンも素晴らしいとの評価が多かった。まち歩きや第九・ハンドベルは港区の各地域情報誌にもたびたび掲載されていて知名度は高いが、料理研究会はその内容が一般に知られることが少ないこともあり、興味があるという項目では1番多かった。とりわけ女性会員から「女の料理教室」に行きたいとの声もありました。今回の活動紹介により間違いなく会員が刺激を受けたことがうかがえるアンケート結果でした。

また、会の内容、運営方法など多くのご意見もいただき、有り難うございました。

（アンケートのコメント欄から代表的なものを紹介しました）

パリ研修旅行速報

「パリの青空のもとで」

9月15日7時27分PM（現地時間）、シャルル・ドゴール空港に降り立ったのは、今回の「パリ研修旅行」の参加者11名（今尾、黒田両先生は現地合流）、CCクラブからは4名が参加した。ツアー会社の案内で一路ホテルへ。40分程でパリ10区、メトロ東駅近くのシティホテル着。

翌16日は、快晴、真夏のような暑さと雲一つない青空がまぶしい。地下鉄でパリ第2大学へ移動、ピエール・クロック教授の出迎えを受け、由緒あるパンテオン校舎で「フランスと日本における能力の減退した成年者の保護」についてのシンポジウムに聞き入る（勿論通訳を通して）。翌日はフランスのNPO団体スクール・カトリック本部でフランスの貧困問題等について話を伺う。大規模な支援活動に感銘を受ける。午後は「パリ市南部地域高齢者保健福祉サービスセンター」を担うスタッフの方からサービスの現状等についてお聞きした。

日本の地域包括支援センターのような役割？で手厚いサービスを提供している様子がかげがえた。18日～19日はパリ観光、凱旋門からシャンゼリゼ通りの散策、セヌ河クルーズで兩岸の歴史的建造物にみとれ、オランジュリー美術館でモネの「睡蓮」を堪能、お洒落なレストラン、カフェでパリの雰囲気を楽しんだ。あっという間の帰国となった。スーツケースのコートが恨めしいぐらい連日の晴天、夏日、そして、どこまでも広がる青空は絵具を流したような青色だった。

（編集部注：パリ研修旅行の詳細は次号で掲載します）

2期生 吉田 由紀子



地域活動紹介

白金台いきいきプラザ 麻雀ボランティア

6期生 白井 レツイ

「地域の高齢者が麻雀を楽しみたいと訪ねて来るが、4人集まらないと無理、初心者なので仲間に入りづらい、男性が多く溶け込めないという声が多くあり、一人でも参加できるものにしたい。協力してほしい」と言われたのは昨年春でした。老人会では会員同士で月2回麻雀を実施中で、それと一緒にすることに（従来は月・水・金の4人セットの麻雀のみ）。

麻雀のルールや運用方法について思案していた時、高輪地区CCクラブの仲間3人がヘルプしてくれました。5期のOさんは麻雀のベテランで白金台特別ルールの作成。1期のFさんと6期のOさんも麻雀台の準備や人数あわせに協力。毎週土曜日午後3時～5時に3卓12名が麻雀を楽しんでいましたが、好評で秋には20名位に増えました。そこでこの2月からは日曜日にも実施することになり、さらに4月からはすべて一人参加型になり、5月には初心者用に土曜日に1卓増にしました。その後さらに参加者が増え、この秋からはすべて（月、水、金、土、日）4卓運用に拡大することができました。

麻雀は指先を使いまた頭を使って「役」を考える等、「認知症予防」に有効といわれ高齢者に好評です。毎回男性と女性が半々といったところ。準備やかたづけ、ゲームのスムーズな進行（点数かぞえ）人数不足対応等がボランティアの仕事です。

さていきいきプラザ等での行事で特徴的なのは参加者に女性が圧倒的に多いことで、孤独・孤立防止から男性の積極的な参加が望まれます。また他地区でも麻雀はありますが、一人でも気軽に参加できる白金台のモデルが高齢者（とりわけ男性）の居場所づくりには最適です。このモデルが他の地区にも拡大できたら素晴らしいことです。興味のある方は是非見学にいらしてください。

CCクラブ員が地域のボランティアと協力し地域での介護予防活動（孤立防止も）が継続するよう微力ですが頑張ろうと思っています。

■運営委員会報告

猛暑と大雨に見舞われた今年の夏、彼岸花の頃が過ぎて、さわやかな季節を迎えました。しばし様々な秋を楽しみたいもので、例年と趣を異にする秋のイベントも催されます。

さて、7期生を迎えて25人で4月からスタートした運営委員会（月末の水曜日に開催）では、当初から運営委員の役割について話し合いました。CCクラブ会員の多くの皆さんの参加が期待できる企画を模索し、7月26日ホームカミングデイ～特別講演（鶴殿学長）と地域活動の紹介～の実施に至ったのです。

当日は各地域での行事と重なり、酷暑であったにもかかわらず、多くの方々にご参加をいただき、学長講演そして4つのグループ代表による活動紹介ともに好評を得ました。当日のアンケートでいただいた皆さんのご意見は今後活かして参ります。

インターネットでCCクラブのホームページの訪問者数が最近増加の傾向です。今年から掲載されているクローズアップCCは次々と号数を重ね、地域で活動している人たちの紹介をしています。一般にも公開し、CCクラブの活動が広く認知されることも私たちの役割の一つと考えています。皆さんの個々の活動が評価され、地域でよりよいつながりが持てるように願っています。
(世話人副代表 篠原 咲子)

■活動計画

1 秋のイベント「新東京丸に乗って東京湾の役割を学ぼう」

10月24日（金）13時30分～16時30分（13時集合）

第1部 「新東京丸」で海上から東京湾の施設見学

第2部 ①コース：東京みなと館で東京湾の歴史・開発状況の見学

②コース：浜離宮庭園の散策（GGクラブ会員の説明）

2 2014年度活動報告およびシンポジウム・交流会

2015年2月28日（土）午後予定

詳細は後日連絡

編集後記

会報部会への参加は、今回2度目となります。前回は協力部員で、今回は運営委員での参加です。前回参加した時200名に満たない会員数でしたが、今年7期生を迎え420名の会員数になっています。この会報誌の情報のみが、ほぼ全員へ配布され、貴重な情報源になっているのではと予想しています。会員の皆さんがこの会報誌を楽しんでいただけているのかどうかご意見をお寄せいただければ幸いです。
(3期生 田中 眞弓)



チャレンジコミュニティ通信 vol.26 2014年10月20日発行
 発行者 チャレンジコミュニティクラブ
 事務局 明治学院大学 総合企画室(地域連携推進担当)
 〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37
 Tel. 03-5421-5247 Fax. 03-5421-5387
 Email ccclub@mguad.meijigakuin.ac.jp
 http://www.minato-ccc.jp

会報部会
 部会長 大竹 裕(5期)
 部員 南 明治(3期)
 部員 坂上 宗男(3期)
 部員 田中 眞弓(3期)
 部員 太田 則義(7期)
 協力部員 入江 誠(4期)